
夏祭り

bamse

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り

【コード】

N8246E

【作者名】

b a m s e

【あらすじ】

夏祭りの夜に起こった出来事。それは一年後絶望としてよみがえ

(前書き)

過去の罪はその後の更正で贖われるものなのか？そんなテーマで書いてつもりです。

「もつと優しく掬わなきゃ。そんなに掻き回したら金魚逃げちゃうよ。」

夏美は祭囃子にも負けない快活な声で笑った。

「結構難しいなあ。」

頭を掻きながら照れ笑いを浮かべる真だったが、彼には金魚など見えていなかった。初めて見る夏美の浴衣姿に心を奪われていた。

永井真は高校二年生、人生初めてのデートに浮かれていた。

高校のサッカー部ではエースストライカーの彼も、夏美の前ではいつもの決定力を発揮しきれない、純情無垢な少年だった。クラスも違う彼等に接点はなかったはずだった。しかし先月の練習試合が真に幸運をもたらした。二人の通う高校は県内有数の進学校で、運動など縁遠い生徒ばかり。その中で唯一気を吐いていたのが真の所属するサッカー部だった。県内の有力校を招いての、自分たちのグラウンドで行われる練習試合に、彼らは燃えていた。二年生ながらもエースとしてチームを引っ張る彼は、先制された直後にゴールを決め返し同点で前半を折り返した。しかし後半戦、真をエースと認められた相手チームは彼を徹底的にマークし始めた。そして彼にボールが渡れば、ファウル覚悟のタックルで潰す。そして何度目かのセンターリングに駆け込んだ真は、明らかに反則とわかる後ろからのタックルで吹き飛ばされた。

「・・・大丈夫？」

はじめに見えたのは青空の下ではなく、保健室の白い天井だった。そして焦点の合わない目に、もうひとつ白い優しい人影が浮かんだ。これが真と京極夏美の出会いだった。真は相手のタックルで脳震盪を起こし、保健室に担ぎ込まれていた。幸いにも怪我がなかつ

たため、養護教諭は保健委員の夏美に真を任せてしまい真そつちの
けで練習試合に夢中になっていた。ようやく焦点が合い始めた真の
目に、夏美のほっとした笑顔が映った。

「お水でももってこようか？」

夏美の優しい声に癒されながらも、やっとわれに返った真は、

「あれ、試合は？」

とややかすれた声で聞き返した。

「まだやってるよ、でも君は出ちゃだめだと思うよ。先生もそう言
ってたし。」

嗜める様に夏美が言った。真が目覚めてほっとしたのか、夏美は窓
の外に目をやった。一本に結わえた黒髪とコントラストをつけるよ
うな白いうなじ、そしてその横顔に真は一目惚れした。いや、美少
女として名高い夏美は真にとって以前から気になる存在ではあつた
のだが、これまで接点がなかったのだ。真は夏美に見とれていた。
その視線に気づいた夏美は、気恥ずかしそうに、

「麦茶汲んできてあげる。」

とベッド脇を離れた。そのしなやかな立ち姿に真は、

「・・・歩く姿は百合の花。」

と以前聞いたことのある、前半を思い出せない七五調を呟いた。

「はいどうぞ。のど渴いでるでしょ。」

差し出した白い手を思わずつかみそうになりながら、真は汗をかい
た麦茶のグラスを受け取った。のどが渴いているのは試合疲れのせ
いか、緊張のせいかわからなくなっていった。自分の頭を混乱
させる初恋のめまいを振り切るように真は麦茶を飲み干した。

「あらら、もう一杯飲む？」

あまりの勢いに夏美は目を丸くした。

「ありがとう、俺永井、永井真っていうんだ。」

自分が介抱してくれた夏美に礼も言わず、名乗ってもいないのに気

づいた真はあわてて自己紹介した

「知ってるよ、うちのクラスの娘にも結構人気あるもんね。あたしは京極夏美です。よろしくね。」

笑いながら答える夏美に思わず、僕も知っているよ、と言いそうになる自分に照れ笑いしながら真は頭を掻いた。他の娘に人気があることよりも、夏美が自分を知ってくれていることが何より嬉しかった。二杯目の麦茶を受け取った真は、口下手で会話を続けられない自分を悔やみつつも、この穏やかな時間がずっと続いてくれることを祈っていた。しかしそれは突然の騒がしい訪問者たちに遮られた。「アー負けた負けた、畜生。」

「おい、真大丈夫か？」

サッカー部員たちがぞろぞろと保健室に入ってきた。

「なんだ元気そうに、二人つきりでお茶してるじゃんか。」

「おい、おい、おい。ちょっといい雰囲気なんじゃないの？」

冷やかし始めるチームメイトを軽く睨み付けながら、夏美が立ち上がった。

「じゃあ、あたしはこれで。先生に大丈夫そうですって言うてくるから。じゃあね永井君。」

サッカー部員を掻き分けるように、夏美は保健室を出ようとした。

真は騒がしいチームメイトに囲まれながらも慌てて声を発した。

「あの、京極さん。」

その言葉に夏美は足を止めた。一瞬静まり返る保健室、真が精一杯続けた。

「ありがとう。」

すると夏美は真のほうを振り返り、

「お大事にね。」

と笑顔で手を振りながら、保健室を出て行った。その後保健室は冷やかしの歓声で包まれた。

これ以来真は通学路や校舎の中、売店でもいつも夏美を探していた。

もう一度逢いたい。あつて御礼がしたい。いやお礼にかこつけて、顔が見たい、話がしたい。しかし偶然遠くから見かけても、声もかけられない初心な真だった。そうこうしている内に、夏休み前日となり、休み明けまで夏美に逢えない絶望が真を奮い立たせた。放課後の込み合う売店のなか、女子の中でもスラリと背の高い夏美を見つけた。

「あの、京極さん。」

勇気を振り絞つて声をかけた。そんな真を夏美は笑顔で迎えてくれた。

「久しぶりじゃない、永井君。その後は怪我してない？」

その笑顔、なにより自分を少しでも気に掛けていてくれたのが嬉しかった。

「うん。」

笑顔に勇気を貰ったとはいえ、このあと何を話していいかわからない真は思わず口籠った。どうしよう、どうしよう。そればかりが真の頭の中を駆け巡った。話しかけるのが目的で、何を話すかも考えていなかった真は慌てた。すると夏美のほうから、

「明日から夏休みだね。」

と助け舟を出してくれるかのように微笑んだ。話題を貰った真は嬉しそくに話を切り出した。

「京極さんは何して過ごすの？」

「あたし？ そうだねあ、部活にも入ってないし、多分毎日扇風機の前でごろごろかな。永井君はサッカー三昧でしょ。」

「そうだね、三年生が抜けたから頑張らないと。」

こんな短いやり取りが真にはたまらなく嬉しかった。そしてこの楽しい時間を終わらせたくない一心で、次の話題を必死で考えた。しかし、母親以外の女の子と必要以上に口をきいたことのない真にはどうしても話題を思いつけず、きよるきよると周りを見回していた。そのときたまたま目に入った売店のおじさんが、だるそうに団扇をバタバタさせていた。団扇、浴衣、夏祭り。真の中で瞬時に行われ

た連想ゲーム。これに賭けるしかない、真は夏美に向き直って言った。

「京極さん、今週末夏祭り行くの？」

この言葉に周囲がしんとした。周りにいた学生たちも面白い場面に出くわしたと息を呑んでいる。少し気恥ずかしそうに夏美は周囲を見回しながら言った。

「え、ああ、まだ決めてないんだ。」

真は何故か、敵のディフェンスの合間にゴールが見えた、そんなチャンスを感じた。

「この間のお礼に、良かったら誘わせて下さい。」

そう言つて真は慇懃に頭を下げた。人前で言つてしまった恥ずかしさよりも、夏美の反応を見るのが怖くて上を向けないというのが真の本音だった。周囲が期待に胸を膨らませているのを察した夏美は、慌てて頭を下げたままの真の手を引いてその場を離れた。二人の姿が見えなくなると、売店周辺で蜂の巣をつついたような大騒ぎが始まった。

「もう、永井君たら。」

白い顔を紅く染めながら、夏美は真を睨んだ。真は自分のしでかしたことに青くなって直立不動を保っていた。よりによってみんなの前で誘つてしまうとは……。

「あー恥ずかしかつた。」

前髪をかき上げながら、夏美は呟いた。真は失意のどん底にいた。もう少しうまく話しかけられたら、友達にもなれたかも知れないのに。先ほど見えたゴールチャンスは気が付けば自殺点だったのか。失望に震える真は

「ごめん。」

の一言しか言えなかった。そしてこの雰囲気になんて耐え切れず、とぼとぼとその場を離れようとした。すると夏美が怒ったように言った。

「まだあたし返事してないけど。」

振り向いた真を夏美は眉を吊り上げながら見つめ、そして笑った。

「お礼してもらっちゃおうかな。」

混乱する真には意味が理解できなかった。するとすねたように夏美が言った。

「お祭り誘ってくれたんでしょ。」

やっと夏美の言葉を理解した真は思わず顔を上げた。今までの挫折感は嘘のように消えた。笑顔の夏美が真を見つめている。

「あー楽しみ。今年は連れてってくれる人いないから諦めてたのに。」

そんな夏美の言葉に天にも昇る気持ちになりながら、夏美の「今年は」という言葉にやや引っかけかきを感じた。しかしそんなことこの喜びに比べればどうということはない。まだ付き合ってもいない夏美の、去年の相手に早くも嫉妬する自分を恥じて真は頭を掻いた。

待ちに待った夏祭り当日、いつもなら男友達と誘い合わせて行っていた夏祭り。真の母親は落ち着かない息子の様子にピンと来た。ジヤージにサンダルといういつもの格好を慌ててデニムとTシャツに着替えさせ、頼んでもいない小遣いを前借りさせてくれた。母親の心遣いに感謝しつつも、浮かれた素振りをこれ以上見られぬように早めに家を出た。待ち合わせの神社前のコンビニ、真は気が付けば30分近く前に着いてしまった。周りには沢山の人ばかり、みんなお祭りに浮かれて楽しそうだ。真は男だけの集団を見つけては、えも言われぬ優越感に浸っていた。

待ち合わせの時間を少し過ぎて、夏美が現れた。白い生地に紫の紫陽花をあしらった浴衣姿、ピンクの作り帯が夏美の歩に合わせて蝶のように揺れる。何より浴衣に合わせて結い上げた髪と露になった白いうなじ。真は挨拶も忘れて夏美に見とれた。視線に気づいた夏美は遅刻を詫びながらもくるりと真の前で回って見せた。

「どっつ?」

思わず息を呑み、なにも言えなくなつた真を軽く睨みつけながら夏美は

「もー、せっかく浴衣着てきたのに、褒めて褒めて。」
とはしゃいで見せた。それでも真はなにも言えず、ただただ夏美の愛らしさに見とれるだけだった。

毎年来ていた退屈な夏祭りが夏美を入れるところも違うのか。真はただ感心していた。べたべたと甘いだけだった綿飴が極上のスイーツとなり、子供だましの輪投げが真剣競技に変わる。神社の境内付近から聞こえる退屈な祭囃子さえも真にとっては最高のBGMに思えた。口下手な真を気遣うかのように、饒舌に語り、笑いかけてくれる夏美。この時間がいつまでも続けばいい、真は真剣に思い始めている。

夏美に勧められ、やってみた金魚すくいは小さな金魚一匹も貰えなかったが、それでも真は夢心地だった。いつの間にか夜の帳が降り始め、あたりが薄暗くなってきた。二人は暑い人いきれを抜け、人気のない神社の境内に腰掛けて、涼をとっていた。こんな美少女と二人つきりなのに、どうして自分は旨く話せないんだろう。真は軽い自己嫌悪を感じつつも、飲み干したラムネのビンをからからと回し、横にすわっている夏美を見つめていた。その視線に気づき、笑顔で応対してくれる夏美に寄り添いたい。そんな願望が頭を過ぎつた、その時である。幸せな時間に突然の終わりがやってきた。

「夏美。」

後ろのほうから誰かの声があった。振り返ると、色白で金髪の少年が立っていた。明らかに柄の悪そうな風情に気おされながらも、真はこの不快な侵入者に向き直った。

「啓介……。」

夏美も驚いたように呟いた。真は平静を保とうとしつつ、夏美に声をかけようとした。

「知り合いなの？」

しかし、夏美が返事をするより早く、金髪の少年は真に飛びかかってきた。座ったままの真はあっという間に馬乗りになされてしまった。「夏美は俺と一緒に祭りに来なきゃ駄目なんだ。てめえ。」

啓介と呼ばれた金髪の少年は憎憎しげに真の胸ぐらを掴み、あらん限りの力で真を殴り始めた。体格には勝る真だったが、突然の襲撃に不意を突かれた上、啓介の容貌に恐れをなしてされるがままになっ

っていた。「やめて、啓介。なんでそんなことするの。」

夏美の悲鳴でようやく啓介の拳が止まった。啓介は真の血に濡れた拳を真のシャツで拭いながら立ち上がり、

「いいから来いよ。」

と夏美の手を引いて境内の裏へと消えていった。真は今起こったことが現実と思えず、今にも振ってきそうな満天の星空を見上げるだけだった。

「ひどいよ、啓介。永井君が何したって言うの。」

境内の裏で夏美は、泣きじゃくりながら啓介の腕を振り解いた。啓介は下を向きながら、ぼそつと呟いた。

「毎年夏祭りは俺と一緒に来るはずだった。」

その言葉に夏美は驚きながらも言った。

「だって、今年はバイト抜けられないって言ってたじゃない。」

啓介はぼつが悪そうに答えた。

「・・・店長と喧嘩して・・・飛び出してきた。それでもしかしたら夏美は祭りにきてるんじゃないかねえかって思って・・・。」

「だからってどうして永井君を殴ったの。」
夏美の瞳からはぼろぼろと涙がこぼれていた。しかし啓介は夏美を見ようとせず、呻くように呟いた。

「夏美は俺と一緒に祭りに来なきゃ駄目なんだ。」

一人取り残された真はただ空を見上げることしかできなかつた。殴られた傷からの出血はいつしか止まり、真の両頬を伝うのは涙だった。殴られた痛みよりも、悲しかった。好きな娘と楽しい時間を過ごしたあとに、その好きな娘の前で良いように殴られるなんて・・・。啓介の見た目と迫力に怯え、何も出来なかつた自分が心底情けなかつた。

夏美はどうなつたのだろう。

ふと真は夏美の身を案じた。啓介は夏美の彼氏なのか？今頃夏美に乱暴してないだろうか？心配になつて真は立ち上がった。かなり殴られたせいか、啓介への恐怖が抜けないのか真の膝はがくがくと震えていた。これでは追いかけるどころか、立ち上がるので精一杯だ。とても夏美を助けることなどできない。その無念さに真は立つたまま声を押し殺して泣き続けた。周囲に誰もいなかったのが、真にとつては唯一の救いだった。

啓介と夏美は子供の頃からの幼馴染。同い年で家が隣ということもあつて、物心が付いたときにはいつも一緒に遊んでいた。地元の有力者だった啓介の父親は厳格で、いつも啓介を泣くまで折檻していた。隣の家にも聞こえてくる泣き声に夏美はたまらず、

「啓ちゃんをぶつならあたしもぶつて。」

と隣家に飛び込み、啓介をかばっていた。泣き虫だった啓介は男友達がなかなかできず、小学校に入つてからも遊び相手は夏美一人だった。お互いの母親と連れてきてもらつたいつかの夏祭りの夜、二人で両親とはぐれてしまい、ベそをかき続ける啓介に

「啓ちゃんのそばにはいつもあたしがいるから。」

と暗い境内で励ましあつたものだ。二人が中学に入った頃、啓介の父親が突然蒸発した。若い女と逃げた等の口さがない噂は、あつという間に啓介をいじめの対象にした。父を無くした息子を立派に育てようと、啓介の母親は必死で働いた。その結果、啓介は家の中でいつも一人ぼっち、母親の頑張りには父親と同時に母親さえも啓介

から奪った。人の顔色を伺って愛想笑いばかりしていた啓介の顔から、いつの間にか笑みが消え、次第に眉間よる皺ばかりが目立つようになったのもこの頃からだった。そんな啓介を夏美はいつも気に掛け、啓介を孤独から守ろうと必死だった。啓介にとってそんな夏美はこの世でただ一人と言っても良い味方だった。

中学二年の夏祭り、啓介に決定的な事件が起きた。いつものように夏美と来ていた夏祭り、この頃から持ち前の愛らしさに女らしさが加わり始めた夏美に、酔っ払いがちよっかいをかけてきた。夏美を守ろうと必死だったが、小柄な啓介はあつという間に地面に転がされていった。無力感に打ちひしがれる啓介の背中を押したのは、初めて聞く夏美のSOSだった。

「啓ちゃん助けて。」

いつも助けてくれていた夏美の悲鳴に、啓介は迷わなかった。持っていたラムネのピンを叩き割り、その切っ先で夏美に絡みつくと酔っ払いの太腿を抉った。酔っ払いは噴出す自分の血液に悲鳴を上げた。その悲鳴を聞きつけて野次馬が駆けつけてきた頃、啓介は返り血に紅く染まりながらも、泣きじゃくる夏美を抱きしめていた。

幸い命に別状無かった酔っ払いが自分の非を認め、どうにか不起訴となったもののこの日から周囲が啓介を見る目が変わった。何より啓介自身が変わった。夏美の為に強くなくてはならない、誰にも舐められないように。気が付けば啓介は悪い仲間とつるむ様になり、それは啓介の風貌自体も変えていった。弱弱しいいじめられっこはいつのまにか、目つきが鋭く切れたら手の付けられない街のゴロツキになっていた。

真はふらつく足でようやく家路についた。腫れ上がった顔を見られないように、遠回りして人目に付かぬように帰った。なによりもこの情けない姿を、誰にも見られなくなかった。両親に気付かれない

様にそつと、家に入り自室のベッドに横たわった。

「畜生。」

眩くと真の瞳からはまた涙が枯れることなく溢れ出た。真はいつの間にか泣き疲れて眠ってしまった。

朝目覚めると、顔がパンパンに腫れ上がっていた。切れた唇からの出血がいつの間にか凝固し、口を開けるのも一苦労だった。ふらふらと立ち上がりながら、のどの渴きを覚えた真は洗面所へ向かった。蛇口に口をつけるように水を飲み、血糊に固まった顔を洗った。しかし何度顔を洗っても、鏡に映るのは負け犬のそれだった。これじやとても外に出られない、両親に見られぬように自室へともどる。今日の練習を休ませてもらおうと、サッカー部の同級生にメールを打とうと携帯を持ち上げた真の目に、無数の着信とメールが映った。無論夏美からのものだった。それを見るだけで昨日の事が、頭の中に蘇ってくる。真はメールを開くことも無く、同級生への連絡すら嫌になって携帯の電源を切った。気がつくとも真の目からはまた涙が溢れ始めていた。

そのころ夏美は一人、眠れぬ夜明けを迎えていた。昨夜啓介を振り解いて、境内に戻ったころには既に真はいなかった。夏美はとにかく真に詫びたい気持ちで一杯だった。そして啓介に謝らせたかった。夏美にとって啓介は殆ど身内のようなもので、今回のことは自分に責任がある、そう思っていた。幾度と無く真へのメールや電話を繰り返したが、返事は無しの礫。真は怒っているのか、それとも怪我がひどくて病院にでも運ばれてしまったのか、まさか万が一ということが無ければよいが……。鳴らない携帯を手に夏美は不安で一杯になっていた。考えてみれば自分の行動は迂闊だったかも知れない。あの境内は啓介との思い出の場所、そんなところに真を連れて行くなんて、もちろん啓介が来るなどとは思わずつい足が向いたとはいえ……。激情家の啓介のことだ、夏美と真が二人きりである

場所にいれば啓介は夏美を取られると思ったに違いなかった。そんな思い込みだけであんな酷いことをするなんて……。夏美は啓介の行動がもちろん許せなかったが、同時に啓介が心配になった。無抵抗の人間をあれほどまでに殴ったのだ、真がもし警察や学校に申し出れば最悪傷害事件だ。以前夏美を守るためとはいえ傷害事件を起こしている啓介のことだ、しかも素行も良くない。惰性のように通っていた高校も退学、場合によっては刑に服することになるかも知れない。そうならないように自分が何とかしなくては……。とにかく真に謝る、そして啓介にも謝らせる、その上で真に穏便な処置を媚びるしかあるまい。夏美は真を心配しているのか、啓介の身を案じているのか自分でも分からなくなっていた。

夏美の心配を他所に、啓介は朝まで神社の境内裏にいた。いつの間にか煙草も切れ、うなだれながら地面に座り込んで朝を迎えた。

夏美を泣かせてしまった。

啓介の後悔はこれだけだった。真に対してなどこれっぽっちも謝罪の気持ちを持ち合わせていなかった。自分はこの助平野郎から夏美を奪い返したい一心だった。それなのに夏美は泣きながら啓介を非難した。何がいけないのだろうか？啓介は自分の今までの人生から、これが正しいと知っている。いや世間一般的には正しくないかも知れないが、自分の中ではこれで正解だと思う。奪わなければ奪われる、傷つけなければ傷つけられる。二度と被害者側に回るのは真っ平だった。あの時真に馬乗りになった瞬間、真の姿が数年前の自分と重なった。怯えて何もできず、夏美の前で醜態を晒す。夏美という観客を除けば真と啓介の二人きり、二人には勝者と敗者の役しかなかった。啓介は敗者になるのだけは御免だった。それで必要以上に真を殴った、ただそれだけのことだ。あの時啓介には勝利の優越すらなかった、あつたのは敗北への恐怖だけだった。

啓介はだるそうに起き上がって、ポケットから携帯を取り出した。

そして夏美に電話をかけた。ワンコールで出たのに驚きながらも「夏美？」

と声をかけた。すると、

「馬鹿、啓介、今どこなのよ？」

と激しい口調の夏美が答えた。啓介は答えずに、

「ごめん。」

と謝った。無論昨日の乱暴への詫びではない。泣かせてしまったことへの謝罪だった。すると電話の向こうから夏美の嗚咽が漏れた。再び泣き出した夏美に狼狽した啓介は、

「もう泣かないで、謝るから。」

と再び謝罪の言葉を述べた。啓介はとにかく夏美に泣き止んで欲しかった。しかし夏美のすすり泣きは止まらない。

「どうすれば泣き止んでくれる？」

啓介はまるで子供ののように夏美に聞いた。すると少し嗚咽が収まりながらもしゃくりあげるような声で、

「お願いだからもうあんなことしないで。」

と夏美が答えた。

「わかった。約束する。」

そういうと啓介は泣き止むように夏美に念を押して電話を切った。そして空を見上げながら呟いた。

「夏美を守ること、そして二度と泣かせないこと。」

あの夜から三日、無断で練習をサボり続ける真に対し、とうとう監督が怒った。そして真の自宅に上がりこみ、両親が止めるのも聞かずに真の部屋へ入っていった。真の顔は大分腫れが引いていたものの、未だに生々しい痣が色濃く残っていた。無論この痣の理由は両親にも話していない、真は誰にも言わなかった。それは一方的にやられた恥ずかしさもあつたが、何より大好きな夏美のことを案じてのことだった。あの啓介という男がもし夏美の彼氏であれば、事が大事になれば夏美が悲しむ。真はそう考え、沈黙を守り続けた。監

監督はしつこく真を問い質した。一方的に振るわれた暴力ならば絶対に相手を許さない、俺が必ず相手突き止めてそれなりの罰を受けさせてやる。監督は最後まで啓介の味方だった。それでも真は最後まで沈黙を守った、誰の為でもない夏美の為に。しかしそれは真にとって最悪の結果を生んだ。

「じゃあ、一方的にやられた訳じゃないのか？普通に喧嘩しただけなのか？」

監督は呻く様に呟いた。真は黙って頷くしかなかった。

「部の規則覚えてるか、問題を起こしたら退部だぞ。それでもいいのか？」

思わず真は顔を上げて真実を口にしかけた、しかしぐっと堪えてしまった。その姿に監督は搾り出すような声で言った。

「本当にいいんだな。」

監督の心が痛いほどにわかった。監督は最後まで真を信じていたが、他の部員への手前、真を退部させるしかないのだ。監督はもう一度念を押した上で、真の家を後にした。真は夏美に続いて、大好きなサッカーさえも失った悲しさに一人泣き崩れた。

夏休みはあっという間に終わった。夏美は何度も真に連絡を取ろうとしたが、結果取れず仕舞いだった。ようやく啓介を説き伏せて謝らせようしていたのに。そして自分も謝るのだ、その軽率だった行動を、そして最後に啓介を真が許してくれさえすれば全ては丸く収まるはず。夏美は自分の考えが甘いことは百も承知だった。しかしそれでも行動せずにはいられなかった。真の家にも数回足を運んだが、真は出てきてはくれなかった。

仕方ない、新学期になれば顔を合わすこともできるだろう。

そんな気持ちで新学期初日夏美は登校した。そんな夏美を待っていたのは、真が休学した報せだった。夏美はクラスメートから聞いたその一言に言葉を失い、ひとり立ち尽くした。事の詳細を知らない夏美の友人たちはそんな夏美を呆然と見つめるしかなかった。

夏美は授業が終わると足早に啓介を訪ねた。突然の訪問に戸惑いながらも、啓介は嬉しそうに夏美を迎え入れた。しかし啓介の部屋に入ると、夏美のただならぬ雰囲気息を呑んだ。

「啓介が殴った真君、休学しちゃったよ。」

夏美の思いがけない一言に、啓介は混乱した。

「え、え、なんで……。」

呟いた啓介に、夏美が向き直った。

「啓介のせいに決まってるじゃない。他に理由考えられない!!」

最後の方は絶叫に近かった。夏美の剣幕に、

「そんな、だって……。」

と啓介はうるたえた。

「あーどうしよう。もう謝ることもできないよ。」

頭を抱える夏美を前に、啓介はただおろおろするだけだった。

「……。二度と会えないかも知れないんだから。」

夏美はそう言うときまた涙を流し始めた。そんな夏美を見つめながら、二度と会えない、という夏美の一言を啓介なりに考えてみた。

「夏美、あいつのこと好きだったの？」

消え入りそうな声で啓介が呟いた。すると夏美は顔をあげて、

「なに馬鹿なこと言ってるの、あたしはただ謝りたくて……。」

と啓介を睨み付けた。啓介は自分が責められているのも忘れ、ほっとした表情を見せた。

あいつとはなんでもなかったんだ。

そんな安堵が啓介を包んだ。そしてしゃがみこむ夏美の横に腰を下ろし、

「好きだよ、夏美。」

と囁いた。告白するほうもされるほうもこれが初めて、二人は一瞬沈黙に包まれた。

「今は……そんな話してないよ。」

我に返った夏美の声にも、少なからず動揺が見て取れた。もちろん

夏美は啓介が好意を持つてくれているを知っていた。しかしそれは飽くまでも幼馴染としてだと思っていた。こんな風に愛の告白を受けるとは夢にも思っていなかった。

「大好きだよ、夏美。」

繰り返す啓介に夏美は混乱した。不意を付かれた夏美はもうなにも言えなくなつてしまった。すると啓介は立ち上がったと言った。

「俺誓うから、二度とあんなことしない。夏美が悲しむような事絶対しない。そして夏美に似合うような男になつて見せるから。」

夏美は今までの経緯も忘れ、啓介に見入っていた。どちらかと言えば引つ込み思案で、泣き虫な、弟のような存在だった啓介。その気の弱さから虚勢を張り、道を踏み外しかけていた啓介が、自分に愛を語り、そして力強く更正を誓うとは。夏美にとっては啓介の好意よりも、自分の為に立ち直つてくれるという一言に感激した。

「信じてもいいの？」

先ほどまでの勢いも消え、夏美は上目遣いに啓介を見上げた。啓介は何も言わず夏美の両手を取り、深々と頷いた。そんな啓介を見上げる夏美の瞳からまた涙がこぼれた。

「どうしたの？」

啓介が心配そうに夏美の顔を覗き込む、するとこの部屋に入つてから初めて夏美が微笑んだ。

「嬉しいの。」

真はあの日以来、殆ど自室に引き籠もつたままだった。そして自分の弱さを呪い続けていた。完全に笑顔が消え、一言も発しなくなつた息子に、真の両親は心を痛めた。何かあったことくらい、痛めつけられた顔と悲しげな背中を見ればわかる。しかし真が話さない以上、両親はその真相を知ることには出来なかった。真相が分からなければ解決しようもない、ただ今は解決よりも息子をこの窮地から救い出してやりたい、それが両親の心情だった。そんな折に母親の弟、真の叔父が訪ねてきた。真の叔父は親族のなかでも変わり者で通つ

ており、人里離れた山奥で一人暮らしていた。赤銅の肌と大自然で鍛えられた隆々とした体つき、一世代前の山男を連想させる大男だった。叔父は引き籠もってしまった真の話聞き、反対する両親を説き伏せてとにかく真と話してみることにした。

「どうした。」

なにも話さない真と二人きり、叔父は真の背中に語りかけた。当然返事はない。すると叔父は腕力に物を言わせて真に正面を向かせた。突然の行動に真は驚いたが、顔だけはそむけたままだった。すると叔父は突拍子もないことを切り出した。

「これから秋になる、色々と忙しくて畑も手が足らん。お前手伝いに来ないか？」

思いがけない言葉に真は顔を上げた。

「ど田舎だけどいいとこだぞ。なにより俺以外誰もいない。」

笑いながら話す叔父に真は驚かされた。誰にも会いたくない、そんな気持ちを理解してくれているのだ。この街にい続ける限り、いつか夏美や啓介に出会ってしまうかも知れない。逃避であつても部屋に引き籠もっているよりはました。真は一も二もなくこの提案に飛び乗った。

両親は当然大反対した。しかしこのままなんの解決策もなく、引き籠もり続ける真を放っておくこともできない。なにより先日まで口も利かなかつた息子が、真剣に叔父との生活を求めている。心に負った傷を癒すにはいいのかも知れない、その日の夜遅くに両親は決断してくれた。高校は休学扱いとして、一年の期限付きながら叔父と真の二人は山奥へと旅立った。

突然の告白から数日後、夏美は啓介の決意を思い知らされた。いつものように一人ぼっちの啓介に、夕飯のおかずを持っていった夏美を迎えた啓介は見るも無残な姿になっていた。自慢の金髪はめっちゃめっちゃに刈り上げられ、腕には無数の煙草の焦げ痕、いわゆる根性

焼きが並んでいた。両の臉は腫れ上がりうつすらと夏美を見つめるのみ、無理に見せた笑顔に欠けた前歯がのぞいた。

「・・・どうしたのよ。」

変わり果てた姿の啓介に夏美は愕然となった。

「大した事ねえよ。」

無理に微笑もうとする啓介を夏美は問い詰めた。

「また・・・喧嘩したの？」

すると啓介は慌てて言った。

「違うよ、違う・・・。」

「すみません、チーム抜けさせて下さい。」

啓介は以前の仲間たちの前で土下座していた。この街でも有数の不良グループ、所詮はチンピラの集まりだったが抜けていく者への制裁は凄惨を極めた。彼らの中に啓介との別れを惜しむ者等いない、一人立ち直り更正しようというその態度が気に入らないのだ。チームを抜ける儀式と称して、一人一人との決闘、いわゆるタイマンをやらされた。無論啓介は無抵抗、そんな啓介をサンドバックのように打ちのめし、倒ればサッカーボールのように蹴飛ばした。立ち上がれなくなれば、立ち上がるまで煙草を両腕に押し付けられる。

殆どの者がこの制裁に耐えかね、足抜けを断念する。しかしそれでも啓介は耐えた。夏美への思いを胸に、永遠にも続くとも思われる暴力に耐え続けた。啓介が数回失神した後、ようやくリーダー格が、「これに耐えたら勘弁してやるよ。」

と手錠を差し出した。最早抵抗はおろか指一本動かせない啓介の両手に手錠が嵌められた。その手錠は鎖でリーダーのバイクに繋がれていた。息絶え絶えの啓介が立ち上がった瞬間、バイクは走り出された。もちろんバイクに追いつける筈もない、啓介は地面に叩き付けられ、そのまま引きずられた。もしアスファルトの上だったら啓介は間違いないで死んでいた。地面が土であることが啓介の生還への唯一の助けだった。しかしこれも長く続けば間違いない啓介は絶命す

る。バイクが空き地を二、三周したころ啓介は完全に動かなくなっていた。

「やべえ、やべえよ。」

自分たちの仕出かした事に驚愕した彼らは、蜘蛛の子を散らすように我先にと逃げ帰った。誰もいなくなつた空き地で意識を取り戻した啓介は、

「夏美、俺、勝つたよ。」

と呟き渾身の力で立ち上がった。

夏美はぼろぼろになつた啓介を抱きしめて泣き続けた。制裁から数日しかたっていない啓介の体は、触るだけで悲鳴をあげる状態だったが、その痛みにすら啓介は満足感を得ていた。病院へ行こうという夏美の提案を頑として固辞する啓介の手当てを終えた夏美は、夜中まで啓介に寄り添っていた。苦痛に耐えながらも微笑む啓介を見て夏美は初めて啓介を頼もしく思った。

真が叔父と山に来てからはや2ヶ月が経とうとしていた。なにより真にとつて叔父以外の人間に会わずにすむのは有難かつた。叔父は真の引き籠もりの理由になどまるで興味を示さず、真を一人の相棒として自給自足の生活を仕込んでくれた。真はぶっきらぼうな叔父の気遣いに感謝しつつ、山での生活に慣れ始めていた。山の秋は早く、収穫を終えた二人は初めて猟に出た。猟と言つてもライフルなどで獲物を捕る訳ではなく、兎や鹿の通り道に罠を仕掛ける、そんな類のものだった。鋭い刃を持った罠が、次々と叔父の手で仕掛けられていく。こんなもので獲物が捕れるのかな？真はそんな疑問を持ちつつも叔父の手伝いを続けた。

翌日山に入ると、一匹の兎が罠にかかってもがいている。兎の足には残酷なほど鋭い罠が食い込み、兎の白い毛を赤く染めていた。兎が真達に気づき、渾身の力で暴れ始めた。兎と思わず目が合つてし

まい、真は目を背けた。すると叔父は何事も無かったかのように、狩猟刀で兎の首を切つてとどめをさした。兎は断末魔を上げる間もなく絶命した。あまりに残酷な光景に目を背け続ける真に叔父が言った。

「生きていくつてこういうことじゃねえのか。」
寡黙な叔父の一言は真の心に響いた。

仕留めた兎を平らげた叔父は、いつものように高いびきをたてて眠ってしまった。真は眠れなかった。あの兎の哀願するような目が忘れられない。叔父もその目を見たはずなのに、躊躇無く兎を殺した。あの兎と叔父の姿が何かとダブって思えた。そう、山に来てからも思い出さない夜は無かったあの記憶、一方的に殴られる自分と啓介真にはそう思えてならなかった。おそらく真自身の目はあの夜兎と同じ目だったのではないか？恐怖に怯え、襲撃者に許してくれと哀願する。兎は何故殺され、自分は何故いい様に殴られなにもかもを失ってしまったのか。真は夜通し考えて、ある結論に達した。兎も自分も弱いからやられたのだ。相手がどうこうではなく、弱い自分が悪いのだ。強ければ兎は叔父と真を殺すことも出来たし、真自身も無残な負け方はしなかったはずだ。叔父は自然とともに生きていく厳しさと残酷さを教えたかったのかも知れないが、真にはそれが曲がって伝わり、弱肉強食というおよそ人間社会にそぐわない真理となった。

啓介は本気だった。今までサボリ勝ちだった高校にも通うようになり、不良仲間とはすっぱり縁を切った。今まで自分の為にだけ稼いでいたバイトも、一人で家計を賄う母の為にしようと決めた。しかし世間は更正した人間にどこまでも冷淡だった。ようやく伸び始めた髪の毛も黒髪のまま、ピアスもやめた。それでも啓介を受け入れるものは少なかった。何より辛かったのは、以前啓介にいいようにやられた人間達の復讐だった。直接手を出してくる者は少なかったが、

口汚く啓介の過去を中傷し啓介を知らない人間に讒言した。それでも平身低頭を貫き、あちこちを回ってようやく手に入れたのは近所の町工場、印刷工場のインクにまみれる日々だった。啓介はそんな仕事にも耐え、更正の一步一步を着実に歩んでいた。夏美はそんな啓介にただただ驚かされた。啓介がこんな根性の持ち主だとは知らなかった。年が変わって春が訪れたころ夏美を喜ばせたのは、啓介が変わった、という街の評判だった。そしてその変化が何より自分のためのものかと思うと夏美は幸せだった。

新年を山で迎えた真は以前よりずっと逞しくなっていた。厳しい自給自足の生活で体はもちろんのこと、精神的に強くなっていた。いつの間にか畏にかかった動物も自分で捌き、食卓に並べることもすら自然に行っていた。叔父はそんな真を微笑ましく見守っていた。こいつは強くなった、困難を克服したと。以前以上に強くなった真なら、家に戻っても充分生活していける。確かに真は強くなった。しかしどこか歪みが生じていることに叔父は気付かないままだった。

山に遅い夏が近づいてきた頃、ある事件が真と叔父を襲った。山菜取りに出かけた叔父の帰りが遅いのを察じた真は叔父の様子を見に行った。そして驚愕した。足を滑らせて沢に転落した叔父、どうやら足を痛めたようだ。そしてなにより真を驚かせたのは、薄暗い森の中から聞こえる唸り声だった。以前キャンプ地として使われていたこの山に、サマードックが住み着いていた。キャンプの際に人が犬を連れてきて、そのまま置き去りにする、それがサマードッグである。その数頭は山の中で生き延び、野犬と化していた。人間に捨てられた犬達は何よりも人間を恨み、そしていつも飢えていた。真は怯むことなく沢に降り、用心の為に持ち歩いていた狩猟刀を構えた。野犬達は得物に怯えることなく、真に飛び掛った。しかし真の狩猟刀はそれよりも早く野犬の頭を割っていた。返す刀でもう一頭切り倒すと野犬達は怯えて我先に逃げ出した。

「大丈夫、叔父さん？」
何事も無かったかのように沢で犬の返り血を洗い流しながら微笑む真に、叔父は頼もしさとは違う、えも言われぬ恐怖を感じていた。この数日後真は山を降りると言い出した。叔父はいつの間にか過ぎた一年が真を変えたと確信した。しかし、これでよかったのかを最後まで自問自答し続けた。

「啓介、早く早く。」
一年があつという間に過ぎ、また夏祭りの季節が来た。啓介と夏美は連れ添って祭りに出かけた。一年前の事等嘘であつたかの様に立ち直つた啓介を夏美は嬉しく思っていた。そして啓介にとつても夏美にとつても有難い未来が待っていた。明日町工場の社長と面接を行い、上手くすれば卒業後の正規採用が待っていた。一年前のことを考えれば、足の重い祭りではあつたが、二人とも馴染みの深い会社に就職祈願を掛けたかつた。そして二人は出店など眼中に無いかのように、神社本堂へと向かつた。

無事祈願を終えた二人は、一年前と同じ人気のない境内に佇んでいた。

「絶対就職決定だよ、大丈夫。あたしが保障するから。」
微笑む夏美だつたが、なにより確信があつた。この一年で街はすっかり啓介を受け入れ、なにより完全に更正した啓介を社会は本人の価値以上に讃え、ちよつとした美談の主になつていた。そんな啓介を夏美は誇らしく思い、以前とは明らかに違う恋心すら抱いていた。啓介ははにかみながら

「上手くいくかなあ。」
と呟いた。絵に描いたような幸せな二人、しかし過去は彼等を許しはしなかつた。

突然の来訪者に二人は言葉を失つた。夏美が持っていたラムネのピ

ンがカタカタと震える。現れたのは真だった。しばらく固まっていた二人だったが、ふと我に返った啓介が真の前に歩みより、

「申し訳ありませんでした。」
と土下座して見せた。その行動で金縛りが解けた夏美も、真に歩み寄った。

「ごめんなさい、永井君……。」
一年があまりに長すぎて、夏美はこれ以上何を話していいか分からなかった。ただ夏美のなかでは一年前の残酷な光景が何度も走馬灯のように浮かんでは消えていった。とにかく夏美も頭を下げた。それ以外にどうすることもできなかったのだ。

しばらくして顔を上げた夏美は驚いた。真が微笑んでいる。

「永井君……。」

夏美は真が謝罪を受け入れてくれたと思った。だが月明かりの下、真の微笑みがどういった意味を持つのかまでは見えなかった。

「立てよ。」

真が啓介に言った。しかし啓介は土下座を続ける。それを見た真の声が怒りに震えた。

「立てつ。」

啓介よりも夏美が震えた。真は決して私達を許していない。どうすればいいのか、夏美には見当もつかなかった。どうしよう、どうしよう。そればかりが夏美の頭を巡った。啓介のしたことを考えれば真の怒りは当然だ。何をされても文句は言えまい。でも夏美は許して欲しかった。真にも更正した啓介を認め、水に流して欲しかった。虫のいい話とは知りつつも。真は夏美など眼中にないかのように、土下座を続ける啓介を力づくで立ち上がらせた。啓介は初めて真と目が合った。怒りに燃えた目は、決して自分を許さないと告げている。そしてその目は一年前の自分の目そのものだった。過去からの復讐に啓介は心底怯えた。

「やめて、お願い。」
そんな夏美の悲鳴も祭囃子に掻き消された。鍛え上げられ丸太の様になった真の腕が次々と啓介の体にめり込んだ。

数分間に、啓介は血まみれになっていた。

「お願い、やめて、やめてよ。」
泣きじゃくりながら夏美は真に縋り付いた。それでも真は完全に無抵抗の啓介を殴り続けた。夏美はどうすることも出来ず、ただ真に懇願し続けた。しかし真は止めないだろう、夏美には分かっていた。真にはそうする権利がある。しかし諦め切れなかった。この一年間必死で更正した啓介の頑張りが全て無駄になる。真に殴られた傷をみて街の者達は言うだろう。あの啓介がまた問題を起こしたようだ。美談などそうそうないあるものじゃない。自分達にようやく見えた希望の光が、いま暗く閉ざされようとしている。だがこの復讐者を止める権利が自分達にあるだろうか？我々は彼からあまりにも多くを奪い去ってしまった。その怒りをぶつけられて当然、抵抗する権利すらありはしないのだ。夏美はただ泣き崩れるしかなかった。そんな夏美を他所に、祭囃子は続き、所々に鈍い打撃音が混じり続けた。

(後書き)

長々と駄文に付き合っていたいただき有難う御座いました。
ラストは非常に悩みました。

・真に手を出させない。

・啓介が反撃する e t c

などなど、もっといいラストがあったらご意見下さい。書き直して
再投稿したいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8246e/>

夏祭り

2011年10月4日16時50分発行